

Philip M. Taylor の *Tara* について

小西真弓

序

19世紀から20世紀中葉にかけて出版されたイギリス小説には、キリスト教徒に刃を向けながらも、その武勇や騎士道精神を称えられるイスラム教徒がしばしば登場する。海外を制覇しつつあった当時のイギリス人にとって、イスラム教徒は恐るべき敵であったに違いないが、彼らの支配的な性格には何となく親近感を感じさせるものがあったのであろうか。イギリス作家が描くイスラム教徒は、中世以来キリスト教徒と覇権争いを繰り返して様々なヨーロッパ文学によって紹介されてきたためか、たとえその奇異な風習や信仰が浮き彫りにされても不可解な存在には感じられない。中近東やインドを直接知らなかった Walter Scott が「高貴な野蛮人」として Saladin や Hyder Ali を描いているのは正にその典型と言えよう。

しかしヒンドゥー教徒と言え、一般的にイギリス小説の中では深みのある好人物として描かれているものが少ない。な

るほど、近世まで商取り引き以外はあまり交流もなく、宗教的にも全く異質な彼らは本国のイギリス作家に理解しにくい存在であったに違いない。インドで直接彼らに近づくにしても、イスラム教徒の社会と比べて閉鎖的なヒンドゥー世界の人々を内側から観察することは容易ではなかったであろう。それにしても、イギリス作家が描くヒンドゥー教徒には、「男らしさ」や「リーダーシップ」に欠けるインテリや狂信的ブラーマン、あるいは財産や地位を得るために狡猾な手段を採る商人や領主といったような否定的な特徴を強調されたものが多すぎるのではないだろうか¹⁾ 特に福音主義や功利主義の影響を受けた作家ら例えば Mary M. Sherwood (1775 ~ 1851) や William B. Hockley (1792 ~ 1860) のアングロ・インド小説にはヒンドゥー教徒を類型化して彼らの道徳的欠陥や後進性を浮き彫りにする傾向が著しく反映されているように思われる。それは正にイギリスによるインド支配や西欧化政策を正当化する植民地言説の表れと言えようが、およそ西洋文明の規範にそぐわぬヒンドゥー教徒

註

* テキストには、Philip M. Taylor, *Tara: A Mahratta Tale*, (1863; rpt. New Delhi: Asian Educational Service, 1986) を使用した。本文中の括弧内の頁数は全てこの版によっている。

1) この点に関しては Allen J. Greenberger, *The British Image of India: A Study in the Literature of Imperialism 1880-1960* (London: Oxford University Press, 1969) 45-53 参照。

の風俗習慣には彼らの伝統や歴史を重んじた作家ですら嫌悪感を覚えたようである。そんな伝統の中で、本稿で紹介する Philip Meadows Taylor の *Tara* (1863) は、17 世紀中葉にマラータの²⁾ Sivaji Bhósly を中心とするヒンドゥー教徒がビジャプールのイスラム教徒に反旗を翻した歴史的な事件を背景にしながら、両信徒の立場を極めて公平な視点で描き出そうとしている注目すべき作品と言えよう。

18 世紀末から 19 世紀前半にかけてマラータの反徒がインドのイギリス軍と何度も交戦したことを考慮すると、イスラム戦士たちが、祖国のビジャプール王国をマラータの独立のためにムガル帝国に売ろうとする Sivaji らの陰謀を暴き阻止するという *Tara* のプロットの展開は、イギリスの読者にとって天意に捉えられたに違いない。17 世紀にインドを震撼させた Sivaji の評価はさておき、18 世紀末から 19 世紀にかけてイギリスと覇権争いをしたマラータの反徒らは東インド会社の支配層にとって、イスラムの反逆者にも劣る「盗賊」もどきに映りがちであった。正攻法で挑みかかるイスラム教徒はたとえ野蛮な敵でも勇猛果敢な戦士

として感嘆の念を抱かせたが、暗黙のうち仲間を集めて不意打ちをかけるマラータの狡猾な戦法はイギリス軍人を憤らせるばかりであった。インドの古代・中世史に造詣が深く、行政官としてマラータの人々と交流のあった M.S. Elphinstone でさえ、彼らに対してあまり良い印象は抱かなかったようである：

[マラータ族]は背が低く、顔は端正ではない。非常に活発で勤勉であり、頑丈で困難に耐える。ラージプート族の誇りや威厳は持たないが、彼らのように怠惰でもなければ処世に対して無知でもない。ラージプート族の戦士は一族の恥とならぬ限りは、戦争の結果をほとんど気にしない。マラータ族の人々は結果の他には何も考えず、そのせいか目的を果たすためには手段を選ばない。ラージプート族の平凡な人間にさえ、何かしら高貴なものがあるのに、マラータ族といえ、最も秀でた者にさえ野卑なところがある。³⁾

このような感想を述べる Elphinstone は、Sivaji が築いたヒンドゥー教国を「盗賊国家」と見なした Vincent Smith らに比べれば⁴⁾マラータ族に対して比較的寛容であったと言えるかもしれない。しかしこの一節が記載されている彼の著書 *The History of India* が、インド高等文官勤務 (Indian Civil Service、略して ICS) 採用試験のテキストに

2) 「マラータ」(Maratha) は、広義にはインドのマハーラーシュトラ地方に住みマラーティー語 (Marathi) を母国語とする住民をさすが、狭義には、同地方の軍事、農業に従事するカースト集団を意味する。マラータの定義に関しては、James Grant Duff, *History of the Mahrattas*, 4th ed. (1878; rpt. New Delhi: Associated Publishing House, 1982) I, 1-19; 下中邦彦『アジア歴史事典』8 (平凡社, 1961), 372 頁等を参考にした。本稿では、「マラータ」を広義な意味で使っているが、*Tara* の中では、マハーラーシュトラの最南端部にあるトゥールジャプールに住む Vyas らの民族性はあまり強調されていない。

3) Mountstuart Elphinstone, *The History of India: The Hindo and Mahometan Periods*, with Notes and Additions by E. B. Cowell (1841; London: John Murray, 1866) 615-16.

4) Vincent A. Smith, *The Oxford History of India*, 3rd ed. by Percival Spear (1920; Oxford: Clarendon Press, 1958) 415.

なったことを考慮すると、Elphinstone のマラータ観は 植民地支配に関わったり、インドに興味を抱いたイギリス人の彼らに対する見解をより否定的なものにしてしまったと思われる。実際に彼に続く19世紀のイギリスのインド史家の多くは、マラータの文化的伝統や独立精神を無視して、彼らを単なる略奪精神に満ちた反逆者と見なしがちであった。⁵⁾

セポイの反乱前後にハイデラバードのニザムの代理としてデカン地方の彼の領土の統治に関わった Taylor が、ボンベイ管区の知事であった Elphinstone と共にマラータの反英感情に悩まされたことは、彼の自伝に語られている。とりわけ彼は、長年後見人として庇護したショラプール(Shorapur)の若いラージャが、マラータ国宰相(Peshwa)の末裔 Nana Sahib らに誘惑され、イギリスに反逆を企てて自殺に追い込まれたことに強い衝撃を受けたようである。⁶⁾ そんな個人的な体験やイギリスのインド史家のマラータ観の影響を反映するかのようには、*Tara* の中でも特に非道な振舞が目立つ悪役はマラータの独立のために暗躍する Moro Trimmul や Maloosray であり、彼らを制圧しようとするイスラム教徒の Ali Adil Shah 国王や Fazil Khan は好感のもてる人物として描かれている。中でも Sivaji のスパイ役を務める Moro は端正な顔つきをしたプレーナ聖典学者であるが、内面には Elphinstone がマラータ族の特色として指摘する「結果の他には何も考えず、そのせいも目的を果

たすためには手段を選ばない」という狡猾で激昂しやすい性格を秘めた悪玉としてプロットの展開に重要な役割を果たしている。

Moro Trimmul が故郷の西ガーツ山脈を下ってデカン地方をさまようのは、マラータの独立を支援する仲間を集めるためである。また彼はその道中で妹 Radha の良縁を探す必要にも迫られていた。彼にとって、許嫁に先立たれた寂しさから Sivaji に夢中になって婚期を逸してしまった妹は厄介者であった。Sivaji も重荷に感じるようになった彼女が、どこか遠くに縁づいてくれることを望んでいた。放浪の果てにトゥールジャプールへたどり着いた Moro は、深い関係をもったヒンドゥー寺院の尼僧 Gunga から、当地のサンスクリット学者でブラーマンの Vyas Shastree の妻 Anunda が後継者の息子を得るために若い第二夫人を探しているとの噂を耳にする。Vyas が40歳位の大金持ちであることを知った彼は、妹が今だに Sivaji に未練のあることを承知しながら、何とか彼女を当人に縁づけようと計画を練る。デカン地方西部のヒンドゥー教徒の名士と縁続きになることは、自分たち兄妹にとって幸いであるばかりではなく、同胞の政治的目標を達成する上でも好都合に思われた。Radha にしても、もはや雲上人となった Sivaji は手の届かぬ存在であり、自分の将来を考えれば兄の意向に従うしかなかった。

5) この点に関しては、石田保昭「マラータを見る目 インド史のためのたたかい」『歴史学研究』第216号(1958), 26頁参照。

6) Philip M. Taylor, *The Story of My Life*, ed. by his daughter (1877; rpt. New Delhi: Asian Educational Service, 1986) 308-31.

妹の同意は得たものの、トゥールジャプールに全く縁のなかった Moro は、Anunda がコンカン地方のワイの出身であることを聞きだし、同郷で年齢もあまり違わない叔母の Sukya Bye を呼び出し故意に彼女に近づけて Radha を Vyas の第二夫人として売り込むことを企む。Sivaji との仲は勿論、年齢まで少々若く偽られるが、器量や家柄に申し分ない Radha は兄や叔母の思惑通り、Anunda や娘の Tara に気に入られ、Vyas との縁談が勧められる。後一押しというところで、Vyas 本人が星占いを気かけると知った Moro は、悪知恵を絞って妹の誕生日の天宮図を Vyas と相性が合うように偽造するが、人の良い Vyas はブラーフマンで教養もある彼の人物を疑うこともなく、Radha を天から授かった伴侶として歓迎する。

あらゆる狡猾な手段を用いたとはいえ、妹を Vyas に嫁がせたことは、その後 Radha が新たな家族に忠義を尽くし、後継者となる男児をもたらしたという結果を考慮すれば、それ自体は責められる非道な行為とは言えないであろう。元々 Moro には、マラータ族の独立のために他人の財産や地位を横領するほどの邪悪な意図はなく、彼が縁続きとなった Vyas に求めたのは、Sivaji の蜂起に対する理解と支援であった！目立つ行動はとらなくてもよいことを条件にして（59）、Vyas が縁故のある有力な領主を紹介することに同意したのも、政治的な使命を果たそうとしている Moro が自分たちに危害を加える「盗賊」もどきにはとても思えなかったためである。しかし、上辺は真面目に見える Moro も異性問題となると、マラータ族に特有と言われる野蛮な略奪精神を大いに発揮し、悪党として奈落の底に突き落とされる羽目に陥る。

政治的な目的を果たした Moro がトゥールジャプールをなかなか去らなかったのは、当地へ着いた早々ヒンドゥー寺院で見かけた美しい Tara に、恋い心を抱いたためであった。ブラーフマンの彼にとって、Kali 神に仕える尼僧になった彼女を我が物にすることは、冒瀆行為に他ならなかったが、どうしても思いを遂げたい彼は、Vyas に嫁がせた妹に Sivaji との過去を暴露すると脅迫して Tara との仲を取り持つように命じる。ところが Radha には、Tara が兄の誘惑にのるとは思えないし、自分を大切にしてくれる Vyas 一家の名譽を傷つけるようなことはどうしてもできなかった。けなげにも彼女は、短剣をふりかざして Tara をおびき出すよう命じる Moro に対して命がけで協力を拒否する。思い余った彼は、とうとう Gunga と共謀して Tara をヒンドゥー寺院から誘拐するが、折しも Sivaji 討伐のためにトゥールジャプール近郊に待機していた Fazil Khan らに見つかり捕らえられる。

Tara によって暴露された Moro の悪業は、若くて潔癖な Fazil を激怒させ、直に父親の Afzool Khan に告発される。Sivaji の手先でもあった彼に対して、Fazil は極刑を望んだものの、Afzool にとってブラーフマンに死罪を宣告するのはためられた。Tara の誘拐の件についても、嫁がせた妹と折り合わない Tara を Vyas から頼まれて遠くの寺へ移す途中であったという Moro の言い訳は、Afzool には信憑性があるように思われ、不問に付す。結局国王に処分を委ねられた Moro は Sivaji との交渉により釈放されるが、彼はその寛大な処置に感謝するどころか、大胆にも Afzool 一家の保護下にあった Tara を再び誘拐して、人気のない場所に連れ込み思いを遂げようとする。しかしその

卑劣な行為は、通りがかりの Sivaji の使者 Govind Narayan によって阻止され、Moro はその放蕩ぶりをマラータの同胞からも非難されるようになる。それでもなお彼は性懲りもなくワイにある Govind の家に引き取られ、ヒンドゥー寺院で祈りを捧げる Tara を力づくでも連れ出そうとするが、彼の執拗な誘惑に耐えられなくなった Tara は彼を振り切って、Kali 神に仕える身の潔白を証明するために、ついに自ら *Suttee* (寡婦の殉死) の生け贄になることを宣言する。さすがの Moro もそればかりは何か思い留まらせようとするが、彼女の決意は変わらない。周囲の仲間も宗教的な儀式を冒瀆するのを恐れて Tara を連れ去ろうとする Moro の計画に水を差す。そのうえ今まで協力してきた Gunga まで Tara に同情し始めて、彼を罵る。逆上した Moro はついに Gunga を刺し殺して自分の部屋の窓から放り投げる。そんな残酷な罪過の報いを受けるがごとく、彼は Tara を救いに來た Fazil のヒンドゥー教徒の家来 Lukshmun に首をはねられ、後にその色恋沙汰の悪行は劇化されて酒宴の席で演じられるようになる。

Tara に対する個人的な欲望のために Moro が犯した数々の悪行や罪は、正に彼の「興奮した時の残忍な顔つき」(44) にふさわしい側面を露にしていると言えよう。しかし、それらは彼の民族性というより、むしろ一人の男性としての道徳性や自制心に帰せられるべき問題のように思われる。同じ血を

分ける妹の Radha は、激しやすい性格を秘めるとはいえ、Vyas 一家から受けた恩に命がけで報いようとするほど誠実な少女なのである。マラータの Moro に限らず、異性に対して破壊的エネルギーを発散したり、身勝手な行動をとる可能性は、人種や宗教を問わずあらゆる男性のうちに潜んでいるのではないだろうか。Moro の性格が、Duff の歴史書に語られていない罪をわざわざ犯すほど歪められていたり⁷⁾ Elphinstone が批判するようなマラータ族の否定的特徴が投影されているとしたなら、それは Tara と Fazil の恋愛を成就させるというプロットの展開上、彼は排除されるべきスケープゴートになる必要があったからで、マラータ族全体に野蛮というレッテルを貼りつけるためではない。なるほど作者 Taylor は、南インド支配に携わるイギリス人として、マラータの支配層による領土拡大のための略奪的行為や狂信的な民族主義には、批判的であったようであるが、彼らを劣等民族、あるいは「盗賊」として侮蔑の対象としてはいない。実際、彼は在印中にマラーティー語を習得して Elphinstone や Grant Duff のようなインド史家が軽視したマラータ文学を大いに賞賛したのである。独自の文化や伝統をもつ彼らは、作者の目に彼らは決して単なる野蛮人には映らなかった。マラータの人々の自然に対する美意識や芸術は物語の中でも次のように紹介されている：

インドの原住民は自然の風景の美しさに鈍感だと言われてきた。イスラム教徒はかなり鈍いと言えようが、ヒンドゥー教徒は

7) Taylor が *Tara* を執筆するのに参考したという Duff の *History of the Maharattas* によれば、Moro Trimmul Pingley なる人物は Sivaji から宰相 (*Peshwa*) の地位を与えられ、マールヴァル地方の歩兵を率いてビジャプール軍と戦ったという。Duff, *op. cit.*, 77, 87, 90, 114-15.

そうではない。この壮大な山脈の中に住むマラータ族はもっと違う。彼らの聖典やバラッド、朗唱用の劇曲には自然の風物を描いた美しい絵画が満ち溢れている。各々が自然の産物の最も素晴らしい組み合わせの中で生活し、巨大な岩や木、深い谷間に棲む精霊のいずれかに崇拜の念を抱くなら、彼らは外界の印象に鈍感で、性格に影響を受けないではいられないだろう。

(408)

このようなマラータ族に対する独自の見解をもつ作者は、何人かの善良なマラータを描き出すことによって、イギリス人のマラータ=野蛮、略奪者というイメージを改善しようという意識があったに違いない。確かに *Tara* の中には、*Moro* や *Maloosray* の性格が悪党として歪められているが、*Govind* や *Radha* のように、それぞれの宗教的理念や良心に忠実に生きる理想的なマラータが何人も登場する。*Vyas* にしても、*Sivaji* の独立運動にあまり積極的でないためか、彼が広義に解釈すればマラータ族の一人であることは忘れられがちであるが、「多くの点で注目すべき人物で、国の至る所で非常に尊敬されている」(7)のである。なるほどブラーフマンである彼は宗教的な寛容性には欠けると言えようが、*Sivaji* のように狂信的ではなく、異教徒との争いは好まない。しかし、非常事態には雄々しく剣を振りかざし武芸を披露する。そんな彼の性格付けには、マラータ族の否定的な特徴もヒンドゥー教徒にありがちとされる「女々しさ」⁸⁾も感じられない。また *Bulwunt Rao Bhósly* はヒンドゥー教徒でありながら、ムガルとの戦いにおいては若輩の *Fazil* の楯

となって負傷するほどビジャプールのイスラム支配者に尽くす。かつて従兄弟 *Maloosray* に家族を殺され財産を奪われた彼にとって、生家の復興は夢であったが、*Sivaji* らの陰謀は売国行為に思われた。そのために彼は、*Fazil* と共にマラータの同胞を敵に回して戦う。*Fazil* の活躍にとって、マラータの情勢に詳しく、「最も信頼できる」彼の協力こそなくてはならなかったのである。狂信的な *Sivaji* でさえ罪のない女子供を戦いに巻き込むのは憚られて、*Tara* を *Fazil* に奪われた復讐に彼の妹 *Zyna* をさらおうという *Maloosray* の提案には釘をさす。彼がビジャプール王国に降伏するようなふりをして敵の総大将の *Afzool* を従者一人と共に自分に近づけ、袖下に隠し持っていた武器で殺害した事件は⁹⁾確かに彼の陰険な性格を象徴していると言える。しかしその悪行も、物語の中で脚色されているように、ビジャプール軍団がトゥールジャプールのヒンドゥー教徒を無差別に殺害し *Kali* 神をなぎ倒すという残虐な事件に対する復讐とするならば、同情の余地が残されているように思われる。作者にとって、イスラム支配者の軛から逃れようとした17世紀のマラータ族の立場は全く理解できないものではなかったに違いない。

Moro の否定的特徴が強調されているのに対して、彼と対決する *Fazil Khan* は理想的なイスラム戦士として、物語で中心的な役割を果たしている。あらゆる不正や悪に対し

8) Greenberger, *op. cit.*, 51 参照。

9) この事件に関しては、*Afzool Khan* のほうが最初に刀剣で *Sivaji* を刺そうとしたという説もある。P. M. Chopra 著 三浦愛明訳 『インド史: Main Currents of Indian History』(法蔵館, 1994), 134 頁参照。

て勇敢に戦い、弱き者を助けるという彼には、イスラム教の理念が投影されているが、宗教的な情熱が彼を狂気に駆り立てることはなかった。彼が Moro に極刑を望んだのは、神に仕える尼僧を凌辱するために誘拐したり、祖国をムガル帝国に売ることを企んだからであり、マラータのヒンドゥー教徒に対する憎しみからではない。彼にとってイスラム教徒の同胞が私腹を肥やすために Sivaji らの陰謀に加担するのは、祖国を守るために何としても阻止すべき卑劣な行為に思われた。そこで彼はまず、Bulwunt Rao の協力を得てピジャプールの重臣で親友の父親でもある Khan Mahomed と Aurungzeeb とが交わした密書の売買の様子や Sivaji の密偵 Maloosray らの動きを探る。そのために身を危険に曝したり、強盗と間違えられて治安判事 (Kótwal) Jehándar Beg のもとに拘留され取り調べを受けるという屈辱も受ける。しかし、あらゆる困難を強い忍耐と勇気で切り抜けた彼は、Khan Mahomed や Jehándar Beg が Sivaji と内通している証拠となる手紙を首尾よく手に入れて国王に彼らの陰謀を確認させる。強い衝撃を受けた国王の気持ちを察した Fazil は父親と共に Sivaji 討伐に参加することを即座に決意するが、Khan Mahomed の裏切りに無関係な息子の Kowas Khan が父親の罪のために妹との婚約を破棄されたり、家督相続の権利を奪われぬように配慮する。

Sivaji 討伐のために Fazil は無論、イスラム戦士として命を投げ出す覚悟で立ち向かう。しかし彼にとって、それはあくまでも祖国を守るためであり、聖戦 (Jihad) であってはならなかった。イスラム教徒といえども売国奴の Khan Mahomed や Jehándar Beg は断罪されてもしかたのない存在であったが、

Sivaji を捕らえるためにトゥールジャプールの罪のないヒンドゥー教徒の婦女子までが犠牲になるとは、想像もできなかった。幼い時から Bulwunt に忠誠を捧げられてきたためか、Fazil にはヒンドゥー教徒の信仰を冒瀆することもできなければ、「彼らをひどく嫌う気持ちもなかった」(337)。そんな彼は、争いに巻き込まれた Tara を聖戦の掟に従って、「捕虜や奴隷」としてハーレムに囲うことを提案する Afzool を説得して、「賓客」として彼女を自分の家族のもとに引き取る。そこで彼女は、Fazil の継母 Lurlee や Zyna から手厚い看護やもてなしを受けるばかりか、異教徒にあまり寛容でない Afzool からも同情されて、ひとまず親族のいるワイへ送り届けられることになる。その道中で異教徒ながら教養や品性のある彼女が入った Lurlee は Tara を改宗させて自分の娘 Fazila にすることを提案したり、Fazil との結婚話まで持ち出す。Fazil にとっても熱病にかかった自分を懸命に看護してくれる Tara は優しい魅力的な存在だった。最初は、あまり乗り気でなかった Afzool でさえ、二人を結びつけることを承諾するが、彼らの縁談話は、Moro にすきをつけて Tara をさらわれてしまい、水泡に帰してしまう。彼女を保護した Govind から「たとえ Afzool の賓客としてでも、ブラーフマンの娘 Tara をイスラム教徒の家庭に滞在させるのは、彼女の名誉と純潔を保つことにそぐわない」(401) と二人の仲に水を差すような忠告をされ、Afzool らは Tara を手放すことを承諾する。しかしワイの母親の実家に送り届けられているはずの Tara が、どういういきさつか、*Suttee* になることを知った Fazil は、何としても彼女の命を救いたく Bulwunt や Lukshmun と相談の上、大胆にも *Suttee* の現

場から彼女を救い出す決心をする。

ヒンドゥー教徒の神聖な儀式を冒瀆したとはいえ、異教徒の自分を救ってくれた Fazil に Tara が恋心を抱いたのも、ごく自然なことであろう。しかし Govind が戒めるように、異教徒どうしが家庭をもつことは、ヒンドゥー教徒の側からは許されるはずもなかった。Tara にとって、Fazil との結婚は背教であり、ヒンドゥー世界との永遠の別離を意味した。なるほど自らの意志でないにしろ結果的に *Suttee* を忌避した彼女はヒンドゥー教徒から「のけ者」扱いされる身となるが、新たな人生のために改宗すれば、それこそ今までの人生や価値観を否定する存在になってしまうのであった。そのために、いかに Fazil が見目麗しい命の恩人であろうと、即座に結婚話に応じることにはためらいを感じたのである。しかしそのような信仰に関する様々な葛藤や障害を彼女が乗り越え Fazil に人生を託す気持ちになったのは、たとえ彼女が名目上「Ayesha」と呼ばれるイスラム教徒になっても、彼自身にとっては「バガヴァッド・ギーター」を秘かに愛する Tara であり、両親との縁を保つことを認めてもらえたからである。

Fazil のヒンドゥー教徒の臣民に対する態度を分析してみると、彼には本来異教徒に改宗を強制しないイスラム支配者の美德が具わっていると言えよう。そのために、彼は「イスラム、ヒンドゥー双方の臣下のアイドル」(109)として慕われるのである。この

ような Fazil の理想的な性格付けに関して、Udayon Misra は作者のイギリス作家にありがちなイスラムびいきを問題にして次のように述べている：

英雄的で誠実な Fazil は、不謹慎なムガル法廷書記の Tulsi Dass や色好みの Moro、残酷だが勇敢な盗賊もどきの Pahar Singh のような登場人物と比べると対照的な雰囲気をもって現れる。Tara が Moro の接近を振り切るために *Suttee* になることを宣言した後に彼女の葬儀用の薪木の側にいるブラーフマンの残酷さや、Tara の父親の無力さ、これらすべては、イスラム教徒と比べるとあまり賞賛すべきところのないように見えるヒンドゥー教徒一般に対する少々一面的な見解を読者に示している。小説の中には、Bulwunt Rao Bhósly のような勇敢なヒンドゥー教徒もいるが、彼らは例外的である。一方で Fazil はイスラム教徒の長所すべてを象徴する存在として描かれている。彼の父親 Afzool、妹 Zyna や母親も大そう好ましい存在として紹介されている。物語全体は Taylor でさえ、二つの社会に対する公平な態度にもかかわらず、イギリス人一般のイスラムびいきに傾きがちであるという印象を与える。¹⁰⁾

Tara を *Suttee* から救い第二の人生を与える Fazil や彼の家族は、確かに世俗的な観点からは彼女を自殺的な行為に追いつめる Moro やワイのヒンドゥー教徒らは勿論、彼女を手放して Kali 神のもとに送ることを阻止できない Vyas よりも道義的な存在に感じられると言えよう。しかしそれは、物語に登場するイスラム教徒全体が人格的にヒンドゥー教徒に優れるとか、ピジャプール王国のイスラム教徒の社会がトゥールジャプールやワイのヒンドゥー世界をしのぐ理

10) Udayon Misra, *The Raj in Fiction: A Study of Nineteenth-Century British Attitudes towards India* (Delhi: B. R. Publishing Co., 1987) 87.

想的な存在であることを示唆するものではない。Taraの人生の選択に関してイスラム教徒がヒンドゥー教徒よりも「賞賛すべき」存在とするならば、それはFazil兄妹やLurleeが示す宗教的な寛容性のためであり、物語の中で彼らのように異教徒の信仰に理解を示すのは極限られた人物である。ヒンドゥー教徒の虐殺に関わるイスラム戦士らは Afzool でさえ 異教徒の信仰に寛容な人物とは言い難い。なるほど平和時には、ビジャプールのイスラム支配層は、ヒンドゥー教徒に寛容であると言えよう。それは国王の重臣Neelkunt Rai PansayやVyasのような見識のあるブラーッマンがヒンドゥー教徒の問題に関してイスラム支配層からアドバイスを求められるほど尊重されていることから明らかである。しかし、一旦彼らとトラブルが起きれば、それは正に聖戦の様相を帯びるのである。ヒンドゥー寺院を襲撃したことに憤るFazilと勝利に満足するAfzoolや宗教省長官との会話は、そのことを如実に表している：

「ああ、神よ」とFazilは叫んだ。「寺やそこにいた人々は、まさか危害を加えられなかったでしょうね。私たちは、神に仕える者には戦いをしかけたことはありませんでしたね、父上。」

「寺そのものには危害を加えませんでしたが、若君 寺そのものには」と長官が両手を得意げにこすりながら言い返した。「それを吹き飛ばすには沢山の火薬が必要なんですよが、持ち合わせがありません。でも、他の使命は首尾よく果たしました。万歳！奴らはもう悪魔信仰を再開できないだろう。もし畏くも国王がお許し下されば、私が この私、Peer Syud Bundageeが 偶像の巣窟を壊しに出向いて、それをモスクに建て替えましょう...」

「父上、彼の言ったことは本当なんです」と、若君は心配そうに言った。

「もしそうであっても、息子よ、それを神に感謝しなければいけない。私は勝利を記念してその使命を果たすのに千ルピー差し出すことを誓った」とAfzool Khanは答えた。

Fazilは、胸がむかついて顔をそむけた...
(339-440)

ビジャプール軍団によるトゥールジャプールのヒンドゥー教徒無差別殺人は、イスラム教徒らが異教徒に不寛容であることを暴くと同時に、彼らが意志統一や内部秩序に欠ける集団であることを露呈する事件であった。実際に、ヒンドゥー寺院内の殺戮行為は、国王やAfzoolの命令によるものではなかった。宗教省長官やPahar Singhに率いられた兵士らが、寺の閉門を拒否され仲間を銃撃されたことに挑発されて勝手に内部になだれ込み、その場にいたヒンドゥー教徒を無差別に殺害したり、町を略奪したのであった。その多くはKali神を恐れぬアビシニア兵であり、彼らはもともと奴隷あがりのためか、トルコ、アフガン、タタール人を先祖とするデカン貴族の支配層とは折り合いが悪く、彼らの命令にそむくことも度々であった。そんな兵士らが争いを止めようとするヒンドゥー教徒の隊長Pahar Singhの命令など聞くはずもなかった。またデカン貴族の中にさえ、いつ反乱をおこしたり、ムガル帝国に寝返るかわからない不満分子もあった！ビジャプールで最も誠実な男」(268)と言われるAfzoolでさえ、かつては一族の繁栄や正統なイスラム信仰のために、シーア派の国王を見限ってスンニー派のAurangzeebからの同盟の申し出に誘い込まれそうになった。結局彼は、あくまでも祖国のために忠誠を尽くすことを誓うが、Ali Adil Shah国王にとっては、異民族異宗派に属する臣下の中で、誰が信頼

できるのかわからない有り様であった。Khan Mahomedの裏切りに気づき始めた国王が、その証拠の書類を手に入れるために宗教省長官と共に危険を承知で町へ出かけるのも、そんな重大な任務を安心して任せられる重臣を選べなかったからである。FazilとKowas Khanの親交を考えれば、Afzoolさえも自分の味方になるか自信がもてなかった。事実、重臣の中でもペルシャ人のJehándar Begやアビシニアの奴隷あがりのKhan Mahomedが売国奴であるかと思えば、Khanの息子KowasはJehándar Begのもとに捕らわれたAfzool親子を助けて国王に忠誠を示す。また宮殿では召使いがBegのスパイとして暗躍する一方で、金のためなら何でもするヒンドゥー教徒のPahar Singhのような悪漢が国王に忠誠を誓って国家の危機を救う手助けをする。このような混乱に満ちたイスラム教徒の社会は、ヒンドゥー教徒の世界を周縁に位置づける秩序ある「中心」ではなく、マラータ族やムガル帝国による攻撃と内部からの崩壊の危機に曝された脆い存在にすぎなかった。

Vyas一家を取り巻くトゥールジャプールのヒンドゥー世界は、中近東や北アフリカから侵入したイスラム教徒の支配下におかれているとはいえ、彼らに同化しない古いインドの宗教と伝統を固持する共同体であり、その結束力は、異民族、異宗派が集まって内紛の絶えないイスラム教徒の社会よりも強いと言える。そんな世界に住む彼らが「あまり賞賛すべきところのないように見える」のは、彼らが人間性を無視した宗教的因習に盲目的に従うためであろう。Vyasにしても娘

がSutteeになることには耐え難く、殉教者として祭られる彼女を見た途端にトゥールジャプールに連れ帰ろうとはしたのである。しかし、彼はブラーマンという立場上、神聖な儀式を冒涇しようとする自分を制止する周囲の圧力に屈せざるを得なかった。たとえ彼が力づくでTaraを救おうとしても、興奮した狂信徒たちが彼女を薪木の上へ連れて行くのは明かであった。そもそもTaraが非人道的なSutteeを決心したり、Moroのような放浪者の目にさらされる尼僧になったのも、幼児婚や寡婦の遁世を美德とする宗教的因習によるもので、両親の望むところではなかった。ヒンドゥー上層階級の習慣によれば、幼い時に形式的に結婚して夫に先立たれたTaraは、「処女寡婦」(virgin widow)と呼ばれる身となったが、再婚は許されず年頃になったら剃髪し白い粗末な衣装を纏う寡婦生活を強いられることになる。世俗的な幸福とは縁のなくなった彼女の生きがいは、Kali神を信仰しながらヒンドゥーの学問に精進することであった。そんな娘が不憫でVyas夫妻は、寡婦生活入門の儀式を周囲の圧力にも関わらず、できるだけ先に延ばす。宗教的因習の掟から逃れられないにせよ、物語の中では苦しい立場に置かれても人間らしい幸福な生活を求めて苦闘するTaraやVyas夫妻の様子が、共感をもって描き出されている：

...もし彼女の夫が生きていたなら、Taraは今からずっと前に彼と一緒にあって、彼の家庭の女主人になっていただろう。ブラーマンの娘として十分な名誉ある地位についていたのに... 未亡人となった娘をサンスクリット学の難解な迷路に導くのは、父親のVyasにとって、愛すべき喜ばしい仕事であった。そして彼は娘に彼自身にひけを取らない知性や理解力を発見した。彼の友人の多くは平凡な慣習を奇妙に刷新

したことに肩をすぼめ、少女の心に学問を詰め込むことは危険だとさも賢そうに議論した。その他の論敵は、声高にそれが多くの者に対する前例となって悪用されるかもしれないと非難し、その問題について論争している最中に、Vyas Shastreeは怒った連中から教本を投げつけられもした。しかしそんな行為に対して彼は、聖典によれば古代には学識の深い女性がいて、男性と競った例が記載されていると抗弁するだけだった。「結局、何が問題だというのだ」と彼はよく言った。「カーストをとやかく騒ぎたてても、娘はもうこの俗世間の人間ではない。神は彼女の望みが絶たれてしまったのを十分ご覧になった。彼女は宗教生活に献身し、私は学問を彼女に授けてその準備をさせているだけだ。」しかしこの事は彼に敵対する学者たちを納得させなかった。それにもましてTaraが今だに普通の身なりをしていて、顔を丸めていないという事実は、彼らの不満を高めた...寡婦生活入門の儀式は近いうちに実行されなければならなかった。両親はそのことを知っていた...

Taraの前にはわびしい寡婦生活以外に何があるというのか。どうして彼女はもう俗世間の人間ではないのに、わざとらしくこの世に生きる者として存在しなくてはならないのか...彼女は夫の面影を悲しく思い出すほど彼のことを覚えていないのである...

「どうして彼は私から去って行ってしまったんでしょう」と彼女は度々低いうめき声で呟きながら、一人で泣いていた。「どうして私をひとりぼっちにしたの。なぜ私を彼と一緒にするようにSutteeにしてくれなかったんですか...」

(10-12)

このような悲惨な状況にあったTaraは、ある日突然Kali神が彼女に乗り移るという出来事によって神に一生を捧げる尼僧(Morlee)となる決心をする。その不可思議な現象には、「長く続いた精神的興奮と内に秘められた気苦労がもたらしたヒステリー的な結果」(26)という作者の合理的なコメ

ントが加えられているが、神がかり的なTaraの様子に周囲のヒンドゥー教徒の中には啓示のようなものを感じて彼女を崇拜するようになる者も現れる。無論、Vyas夫妻にとっては娘が剃髪や粗末な白装束を強要されることのない尼僧となり、家からヒンドゥー寺院に通う生活を送ることができるのは、それこそKali神の加護のように感じられた。しかしあまりに美しく、身につける衣装も高価な彼女は、Moroの気をひくばかりではなく、Gungaのような貧しく身分の低い尼僧から嫉妬されたり、厳格なヒンドゥー教徒の非難的的となって窮地に陥る。

マラータのGovindに保護されたTaraは、ワイにある彼の家に母方の親族と連絡がつくまで滞在することになった。そこで彼女は、Govind夫妻から不幸な境遇を慰められるが、彼の姉で寡婦生活を送る姉のPudma Byelは、寡婦であるはずのTaraが高価な衣装や装身具を身につけているのを身のほど知らずとして非難する。Kali神に仕える尼僧は寡婦の装いを免れるというTaraの弁解は、厳格なヒンドゥー教徒の彼女に通じるはずもなかった。Pudma Byelにとって、華麗な身なりをする尼僧は娼婦にも等しく、その純潔性まで疑わしかった。またイスラム教徒のAfzoolのもとに身を置き、ヒンドゥー教徒として「穢れた」Taraを自分たちの家に滞在させることは恥であった。そこで彼女をのけ者にするために、村の宗教監査役Wittul Shastreeと共に、異端審問のごとくTaraにKali神に仕える身であることを証明するように迫る。周囲の迫害に対してTaraは、自らの信仰を証明するために断食をしたり、近くのヒンドゥー寺院に行ってKali神が自分に乗り移るのを披露しようとする。しかしそこで偶然にもGungaやMoro

に出会い、プラタープガル付近で Afzool 軍が Sivaji の奇襲によって敗北した事を知らされる。両親がピジャプール軍団によって殺害されたと思い込んでいた彼女にとって、Afzool 一家までが滅亡しては、もはやこの世に自分を愛してくれる人間が一人もいなくなったも同然に思われた。そんなショックを受けた彼女の精神が神がかり的な状態になるはずもなく、彼女は絶望して *Suttee* に身を投じる決心をする。

Kali 神のもとへ行く決心をした Tara が両親の生きている姿を見て動揺したり *Suttee* の積み上げられた薪の上で失神してしまうのは、信仰に対する背信行為ではなく、生身の人間としての本能と捉えるべきであろう。いかに彼女が Kali 神を崇拜する敬虔な尼僧とはいえ、思い出すらない夫のために両親の目の前で炎に身を投じるのは、ヒンドゥー教徒でない読者にとって、狂信の極みとしか言いようがない。Tara の *Suttee* にまつわる一連のエピソードは、ヒンドゥー教の否定的側面を強調するものであるが、彼女を取り巻く信徒の多くは迷信に惑わされて理性や感性が麻痺しているだけで、人間性を喪失しているわけではない。確かに Vyas 夫妻は一時的に、Tara が *Suttee* の現場から強盗のような集団に連れ去られた事を不面目に感じ、彼女が神聖な儀式によって昇天したほうが救われるような気がした。「興奮と宗教的な熱狂、自己犠牲の栄光までもが、少なくともしばらくの間、彼女の両親の人間性を麻痺させたのだった」(514)。しかし、他人の亡骸を強盗に殺害された娘のものだと思いついて茶毘に付した夫妻は、悲しみのあまり気も狂わんばかりとなる。そんな二人は、Lukshmun から Tara が無事であることを伝えられて大喜びする

が、彼女が人間らしく生きる道は Fazel の妻になる以外にはないことを認識させられて当惑する。「主義によってイスラム教徒を避ける」(48) Vyas には、異教徒に嫁ぐ羽目になった娘の運命が、「前世の罪業の罰」(516) のようにも思われた。「しばらくの間、Shastree の無慈悲な信仰が彼の前に立ちはだかり、彼にのけ者に会いに行くことを禁じた。しかし人間性が彼の信仰を圧倒し」(513)、彼は妻と共に迎えに来た Bulwunt の案内で Tara に会いに行く決心をする。そればかりか、彼女の無事な姿を見て感激した Vyas は、Tara がイスラム教徒に生まれ変わって新たな人生を送る事を背教ではなく、Kali 神の意志として正当化し、招待された結婚式にも顔を出す。Anunda も、ブラーフマンの妻として「穢れることなしに Tara に触れられるか、あるいは触れられずにすむか考え続けた」(517) が、自分との再会を泣いて喜ぶ Tara を抱きしめずにはいられなかった。元々 Vyas ほど宗教的に厳格でない彼女は、Tara がヒンドゥー教の信仰や学問を捨てても、一人の女として充実した人生を送るようになったことに喜びを見出し、Lurlee に娘を感謝して託す：

Shastree が外へ出されている間に、Anunda は Tara を横に置いて立ち上がり、Lurlee の前でおじぎをし、彼女の足元に口づけをしてその膝を抱きしめた。「Tara はもうあなたの子供です、奥様」と Anunda は言った。「母親の感謝と感激を Tara の名誉と人生のために受け取って下さい 私たちヒンドゥー教の簡素な流儀では、こうする以外にどう挨拶したらいいかわかりません。」

「いいえ、私にではなく、彼女を救った Allah の神にですよ。私たちにではありませんよ」と Lurlee は答えた。「異教徒でもあなたがたは高貴な方たちです。お互いの神

から一人の娘を与えられた姉妹として抱き合ひましょう。」

...「遅かれ早かれ、それは実行されなくてはならない」と Anunda は自分に言い聞かせた。「すぐにした方がいい。こちらへおいで、Tara。私があなたを取り戻してから何てまた早く手放すのかしら 私を許してくれますか。この子をお連れ下さい、奥様」と彼女は Tara を Lurlee の腕の中に入れて話を続けた...

「お前は本当のブラーフマンだ」と Vyas は Tara がかつて古い訓戒を朗唱した時のように彼女の頭をさすりながら言った。「それから、お前はこれらの訓戒も Kali 神も忘れないだろう。もしお前が忘れてしまったとしても、Kali 神はお前を誓いから死ぬまで解放してくれなかった。本当に Kali 神は一つの命を与えられようとしたのだ...お前の幸せに結びつく新しい人生を与えた...」

(518-19)

Vyas の言葉通り、Tara は改宗を誓ってもヒンドゥー教の教えを忘れることができず、死の間際にも Kali 神を呼ぶ有り様であった。またイスラム教徒の風習に同化しきれない彼女と Fazil の結婚も周囲の人々すべてから歓迎されたわけでもなかった。「Afzool の旧友の中には、〔Fazil〕の選択を嘲笑したり、非難する者もあった」(523)。しかし Fazil のもとで、良き妻、母として尽くした Tara は、新たな家族から愛されるばかりでなく、近隣からもイスラム教徒の社会の一員として慕われるようになる。そんな彼女の良い評判を風の便りに聞くことは、異教徒に娘を手放した Vyas 夫妻にとって、何よりの慰めとなった。

おわりに

歴史小説にメロドラマの要素を加えた *Tara* が、Walter Scott の小説ほどに評価されないのは、*Blackwood Magazine* が指摘するように小説技法という点において作者の力量が不足するためであろうか¹¹⁾確かに物語の中に散在する冗漫な風景描写や紆余曲折するナレーションは芸術作品としてのこの小説の統一性を損ねていることは否定できない。また一見何の繋がりもなさそうな様々な事件や人物の謎めいた絡み合いも正に南インドの複雑怪奇な多様性や政治的陰謀を反映しているのであろうがその脈絡を辿るのが困難で、物語の全体の理解を難解にしているように思われる。しかしこの小説の価値を、アングロ・インド小説の系譜の中で捉えれば、「分割統治」が提唱される時世にあつて、ヒンドゥー、イスラム教徒の宗教思想の差異を意識しながら、個人レベルでの結びつきを提起した点にあると言えよう。長年南インドで原住民と共に生活した作者にとって、両信徒はいずれも人間としての自然な感情を共有し、お互いの信仰を尊重することによって共存できる「インドの民」であり、軽蔑すべき「他者」には感じられなかった。Taylor が描く南インドの人々は、内側から観察された生彩ある人物であり、彼らが繰り広げる真に迫るエピソードが溢れる *Tara* には、Scott の小説に劣らぬ魅力を感じさせるものがある。

11) “Tara,” *Blackwood’s Edinburgh Magazine* 94 (1863) 626-27.